

---

# コックリさん

うわの空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ツクリさん

【著者名】

「うわの空」

【あらすじ】

「ツクリさん、ツクリさん、おいでください。」

(前書き)

若干、残酷描写があります。苦手な方はご注意ください。

「コツクリさんでもやうつか」

俺はニヤニヤしながら、自分の財布から十円玉を取り出した。目の前にいる彼女は、首を振る。

「嫌だよ、呪われちゃうよ。それにこの年になつてコツクリさんとか、恥ずかしいし」

確かに、高校生にもなつてコツクリさんなんて馬鹿らしさをやる奴は、そんなにいないだろ？ しかもカツブルで。しかしながらかんだ言つて、怖がりの彼女はすっかりビビついてる。まあ、場所が場所だからな。

ガタガタと鳴る窓カラス。雨の当たる音。規則的に並べられた机。薄暗い、放課後の教室。

「だけどこの大雨の中、帰りたくないだろ？」

俺がそう言うと彼女は窓の外を見て、小さく頷いた。

「特に話題もなくて、暇だし」

俺がそう言うと彼女は何かを考えて、小さく頷いた。

「で、ちょうど十円玉も紙もペンもあるし、コツクリさんでもやうぜ。暇つぶしだよ、暇つぶし…」

「なんでそこでコツクリさんになるの…？」

お前を怖がらせてやううと思つてゐるから。とは言わずに、「細かいことはいいじゃん。だーいじょうぶだつて！ 呪われたりしねーよ」

俺はへらへらと笑いながら、準備を進めた。

俺のプランは単純明快。俺が十円玉を動かす。それだけ。『のろ

つてやる』とか『たたつてやる』とか、彼女が怖がりそうな言葉をコツクリさんが言つたように見せかければいい。彼女は本当に怖がりで、B級のホラー映画ですら途中で退席するほどだ。こんな突発的なコツクリさんでも、さぞかし怖がるだろ？。

さんざん怖がらせて、最後には『おれだよ あいしてる』……なんんで、ね。

「よしできた」

俺は、鳥居やらなんやらを書いた紙を彼女に見せた。実を書つて、コツクリさんのやり方なんて大して覚えていないので、適当に作った代物だ。まあ、鳥居とかを書いてたらそれっぽく見えるだろ。

彼女はその紙を、不気味そうに見つめた。やりたくないど、はつきり顔に書いてある。しかし、やめてやる気はない。

「ほらお前、向かい合つて座れよ。隣同士だと変だろ？」

俺に言われた彼女はしぶしぶ立ち上がつた。テーブルをはさんで向かい合い、俺たちの真ん中に紙を、その上に十円玉を置く。

「……ねえ、本当にやるの？」

やる前からビビつてやがる。俺は内心で爆笑しながら、顔では優しくほほ笑んだ。

「大丈夫だつて」

人差し指を十円玉の上にのせ、

「コツクリさん、コツクリさん、おいでください」

……これでよかつたよなあ、確か。

目の前の彼女を見ると、すでに小さく震えている。おいおい、今からその調子で大丈夫か。俺は心の中で笑いながら、十円玉を動かそうとした。ところが、

「え？」

十円玉が勝手に動きだし、『はい』と書いてある場所まで移動した。そして、ぴたりと止まつた。

「やだ、や、来たの！？」

彼女の顔がこわばる。しかし、十円玉から指を離そつとはしない。そういえばコッククリさんをやつてゐる最中に指を離したら呪われるとか、そんなのがあったな、確か。

十円玉が勝手に動いたものの、俺はビビってなかつた。そもそも俺は、幽霊を信じていない。コッククリさんだつて、『コッククリさんをやつてゐる人間の潜在意識によつて、無自覚に指が動いてしまう』という話を信じてゐる。恐らく今のも、怖がりの彼女の指が勝手に動いたんだろ。

しかしここは、俺もちょっとほんのりおいた方が、彼女としては怖いかもしれない。

「き、来たみたいだな……」

俺が消え入りそうな声で言つて、彼女が涙ぐんだ。

「ねえもう、帰つてもらおつよ」

いやいや、ここからが本番だろ。

「せつかく来てもらつたのに、なにも訊かないで帰らせるのは失礼だろ？ なんか訊こいつば。えーと。コッククリさん、雨はやみますか？ 俺たち、雨に濡れずに家に帰れますか？」

ゆづくりと、十円玉が動き出す。まずは、『いいえ』の文字の上。つまり、雨はやまないらしい。十円玉はそのままゆづくと、五十音表の方へと動いた。か・え・れ……

『かえれない』

「やだああ

彼女が今にも泣き出しそうな声を出す。その声を聞いて、俺は吹き出した。

「落ち着けって。雨がやまない？ んな」と、あるはずないだろ。

「コックリさんも馬鹿だなあ」

俺は笑いながら、コックリさんに問いかけた。

「コックリさんは、子供ですか？」

十円玉がゆづくと、『はい』の方へと動く。

「子供だつてさ。じゃ、いざとなつたら俺が力すべでコックリさんを止めてやるよ」

俺が笑うと、彼女は目に涙を浮かべたまま、力なく笑つた。

少し茶化したよつた質問もしてみたが、コックリさんは素直に答えてくれた。

「コックリさんの性別は？」『女』

「彼氏はいますか？」『はい』

「彼氏がいるのか。やるなあ、コックリさん。その彼氏はかつこいいですか？」

『はい』

「へええ

俺がへらへらと笑うと、彼女が震える声で言つてきた。

「ねえ、もう帰つてもらおうよ」

彼氏がいるコックリさん、なんてふざけた設定でもまだ怖いのかといつは。俺はがたがたと震える彼女を見ながら、ニヤニヤした。ちよつといい暇つぶしなつたなあ。

そこまで思つたところで、ふと疑問が浮かんだ。

「で、どうかせ、コックリさんつていの十円玉の中こごるのかな？ 十円玉に憑依してゐわけ？」

「さあ……」

「彼女も首をかしげる。俺は十円玉に向けて、問いかけた。

「口シクつせんせ今、十円玉の中こいぬんですか？」

十円玉がゆりくじと動く。

『いいえ』

「あれ？ それじゃあ口シクつせんせ今、ゼニにてこむんですか？」  
続けざまに問うと、紙の上を這いつゝに十円玉が動いた。き・み

……

『あみの めのまえ』

やられた。素直にそう思つた。

彼女が十円玉を動かしていたんだ。俺がやろうとしていたことを、  
彼女が先にやつたわけだ。『子供・女・彼氏がいる・俺の目の前きみ』  
……なるほどね。

「なんだよ。お前が動かしてたのかよー」

俺は笑いながら顔をあげた。そして、目を見開いた。

田の前の彼女には、首がなかつた。

引きあがられたような傷口から、赤黒い血液がピュッシュピュッシュと噴  
き出してこむ。管のようなものが、いくつか覗いていた。

首のない彼女の後ろに、おかっぱ頭の女の子が立っている。白い頬に付着した、赤い血。目があるはずの部分には、黒い穴が開いていた。

女の子は、十円玉が動くような速度でゅうへっと、笑った。

「君の目の前」

窓をたたく雨の音が、一層激しくなる。

俺たちが生きている間に、雨はやまない。家には、帰れない。

俺の首にゅうへっと、細い指が絡みついた。

(後書き)

実はこの作品は当初、200文字小説として書きました。が、200文字で納めてみたもののいまいすゞエンと来ず、『短編にした方がよさそうだな』と思つて、書いた（書き直した）ものです。

以下に、200文字として書いていた分を張り付けておきます。

彼女と一人で、コツクリさんをやつた。  
向かい合つて座り、十円玉に指をのせる。

「コツクリさん、おいでください」  
十円玉が動いた。成功だ。

「コツクリさんは今、どこにいますか？」  
十円玉が動く。き・み・の……

『君の田の前』

「なんだ、十円玉を動かしてたのはお前の仕業か！」  
笑いながら顔を上げた俺は、固まつた。

田の前の彼女には、首がなかつた。

首のない彼女の後ろに立つて、おかっぱ頭の少女は笑う。

「呼ばれたから、来たよ」

「ここまで読んでいただき、ありがとうございました。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5601v/>

---

コックリさん

2011年10月9日01時50分発行